論　文

越中の絵入り俳諧一枚摺と絵師達

Haikai Ichimaizuri' Pictures(prints of illustrated poems) and Artists of the Etchu Region

大西紀夫
OONISHI Norio

はじめに

以前、筆者は、「金沢の絵入り俳諧一枚摺と絵師達」(『江戸文学』25)で、金沢における絵入り俳諧一枚摺は「民間の絵師が活躍する格好の場であった」と総論的なことを述べた。その後、加賀藩の一枚摺りを多く見るに及んで、民間の絵師か藩のお抱えの絵師であるかを問わず、絵入り俳諧一枚摺は、当時の絵師達が活躍する格好の場であると訂正したほうがよいと考えていた。

そこで加賀藩の支藩の富山藩の場合、幕末に前田利保がまとめた『本草通串証図』(嘉永6)で、見事な彩色の薬草の下絵を描いた藩の絵師山下守胤や応真斎守美らにも、必ずや絵入り俳諧一枚摺が存在するはずであった。とくに後者の守美のように幕末から明治にかけて多くの売薬版画や俳書の挿絵の下絵を描いて活躍したような絵師であれば、俳諧一枚摺の絵にも携わっていても不思議でなかった。

しかし、このことを証明するに足るものは、残念なことに久しく目にすることはなかった。それは、俳諧一枚摺というものの価値が今日までほとんど顧みられることがなくて、そのため散逸してしまったということや、富山市が戦災に遭っていたため残っていないことなどが考えられた。そのかわり目にすることの出来たものは、金沢の絵師によるものか、高岡の絵師のものが数点のみであり、富山藩の絵師のものに出会うことはまったくなかった。

それが、北日本新聞の平成18年、7月31日付朝刊の一面で紹介された(注1)岩瀬の清水孝一さんのところで発見された俳諧一枚摺は、筆者が長い間捜していた富山藩の絵師によるものであった。これは全部で二十一枚あって、うち山下守胤のものは一枚、そして松浦守美のものは、なんと六枚もあった。幸いなことに保存状態もよく、地元富山で刷られたもので素晴らしい逸品であった。おそらく前田利保の『本草通串証図』の制作の工房で培われた技術と才能が、俳諧一枚摺でも開花したに違いなかった。

さて、この新聞記事の後、この年の十二月に、筆者は五回にわたって「越中の俳諧一枚摺を読み解く」と題して清水さんのところの俳諧一枚摺をカラー写真で載せて解説した。これがきっかけとなって、俳諧一枚摺の情報が筆者のもとに集るようになった。ちょうどこの年の秋頃であったろうか、射水市の新湊博物館で、大門、島の十村、折橋家の古文書の(注2)調査中に沢山の俳諧一枚摺を発見することになった。これは折橋家十一代の二策、俳号井里の関係した一枚摺であった。全部で四十二点あったが、中に守美のものが六枚もあった。いずれも幕末のものであったが、この発見のことは、平成十九年一月一日付の北日本新聞の朝刊に紹介された通りである。

また今夏、射水市の中島俊夫氏から屏風に張られた俳諧一枚摺を見せていただいた。全部で十三枚あり、能登のものに混じって氷見のものが

おおにし　のりお（経営情報学科）

木がらしや尻声高き浜の人　ワカクリ　栗岡
見かけたる隣の遠き雪の朝　若人
風雲におちる日影や啼千鳥　桜台
追分のわかりかねたる深雪哉　石亭
をりふしは帯にもはさむ頭巾哉　林花
茶の花のにほふ垣根や日のおもて　南畝
世間者の山見にさそふ冬至かな　如蝸

行衛の先ヅあてもなき小春かな　三日市　完哉
魚わける最中に降あられかな　蘭圃
水鳥の岸へもよらず暮に鳧　雪斧
木枯しや多葉粉にむせる駕籠の内　素人
留守もりに枕あてがふ十夜哉　不及
山茶花や寒さのみゆる花の底　恕兮

跪く度に気づかふ帋衣かな　イクジ　亀齢
朝おろしうしろにうけて大根曳　春郊
山茶華や一枚毎にをるつぼみ　鳥道
ぬいてから重たくなりぬ雪の笠　碧山
葉の透のみへるや石蕗の花盛り　波平
手を添へてくれるたれ葉や水仙花　雪布
山茶花や一ツ咲にも念の入る　旭芝

枯くに虫も声ある小春かな　ウオヅ　乙雄
寒菊や折た処で葉ごしらえ　楽水
川風の吹初る日やみそさゞい　兆非
かれながら鬼灯赤し初しぐれ　花弟
しぐるゝや黄菊の色さめるほど　素紈
ほつこりとした夜もありて冬の月　文同
初時雨あとは月夜と成にけり　文為
なしに来て溢るゝ傘のあられ哉　素由

田一枚水ありだけの氷かな　ナメリ川輝水
川おとを聞く榾を焚夜哉　蜃浦
しぐるゝや竿もさゝずに下り舟　栗雄
松の葉もともにこぼして初時雨　啓舟
ふみすれた石の光りや冬の月　気丸
つる草も扇ぎて戦ぐや初時雨　蘭阜
梅が香もほのかに添ふて納豆汁　季円

納豆や加減をつくす其薫り　水ハシ称平
山茶花や不時に客あるはなれ庭　文丸
水鳥の居所かへる薄明り　伯有
炉開の夜に入てさく椿かな　一斎
入口の家から早し冬がまひ　琴甫
朝かぜやちゞらに凋む葱の波　定爾

山茶花や覚束なくも咲続く　東イハセ筍堂
村ちかう来ては遠退く千鳥哉　仕候
大松の苔うきたつや神無月　貫之
行ほどの家は留守也小六月　如松
出る舟のうねりにゆれる小鴨哉　河東
吹癖のなりてあるなり枯尾花　二老
ともしびで梅見てゐるや冬籠　径月
みそさゞい箕を簸糠に追れけり　君凪
霜の夜や聞へるものは咳ばらひ　文水
灰汁桶の雫のひかる寒さ哉　楓斎

鰒喰ふた鍋つき出して朝寝哉　竹啄
初霜や竹も汗かく朝の内　不外
落葉して伐ごゝろやむ榎かな　知龍
松杉のをくれかしけや雪あらし　鳩斎」（上段）

降音と飛おとわかるあられかな　紀白
さゞ浪のより来る磯の霰かな　兎園
みぞるゝや寝時過たるひとり酒　葦村
朝よさの皺も伸さぬ帷衣かな　松朝更月笑

ながれ寄る落葉に照るや夕日影　雀巣
独り居のひとりうかれて朝の霜　秋斎
川鳴りも幽になりぬ雪の朝　泰斎
持とけてちらぬ様子や蔦の雪　可庭

降さ中はき出す雪吹戻しける　竒雲
雪は落て茨垣とはなりにけり　其園
新床の寝心にきくあられ哉　和水
寒菊にかゝるや覗く鼻の息　都盤

汐みちの別に光るや冬の月　路向
漁の炬り横ぎるちどり哉　如イ
焚足して結句けぶらす榾火哉　許白
冬ごもり明けて嬉しく啼雀　花席
あれも京の人であらふか鉢扣　柿生
撫てある庭としらでや帰花　素章
あくせくと橋の往来や年の暮　少年芳太郎
窓ひとつ月とも日とも冬ごもり　李水
水は水で澄て行けり雪のかげ　一斎
鳥の来る小薮も持てけさの雪　其風
潜りとて鵜のはハするやをしの中　其諺

夜をなくひとりおもうか暖め鳥　墨他

水際や雪の厚さのあからさま　凡丈
初雪のたまりもあへず鷺の舞　文友
川鳴りをおし込て散る木の葉哉　可丈
松風と聞夜も雪のつもりけり　守胤
料理人の臆病つくる河豚哉　子光
年わすれ忘るゝ程に酔にけり　可九

榾の火や窓にかげさす自在竹　雨夕
春まつや時計の側の針仕事　三外
寒声の戻りや白湯の真加減　瓜流
初子の居らぬ住ゐや冬至梅　孤庵
ぬくめ鳥只一ツある家の陰　少年其水
いけ筒に置ても見たし冬椿　、雲石
堀川へはや来て居るや鴛の声　、禾風
おしのけて挨拶うける火鉢哉　是少
船頭のふとん引はる夜明かな　応念
足もとのおこつくやうや雪車のあと　樗山

角をまく藁もこぼるや斑牛　栢支
すゝはきや背戸まで廻る樽ひろひ　夕周
禅寺の寒ぎくさきぬ一畠　基白
鰒の友挨拶もなきあぐら哉　田梅
節季候も蕎麦家さし行嵐哉　有芳

水仙に吹葦ほこりかゝりけり　右亀
埋火や琴の音通ふ釜のにえ　芳斎
年忘れかれにもあるや舟住ゐ　梅隣
ふたりして足とゞめるやかへり花　千代女
松風に吹さらされて雪仏　班山
寒月や水田四五枚山の間　兎瞻
やどり木に日脚とゞくや冬木立　有栗」（中段）

餅春や板の間ひゞく持はこび　西江
たまつては一人もゆかぬ吹雪哉　楮国
みそさゞい来るや適にも隙ある日　斗祥
燈をかるに門の戸たゝく寒サ哉　素正
囲ひ間は別にあかるし水仙花　梁窓
吹ぶりのいとひもあらず寒念仏　しゅん女
灯ともして水汲おとやとしの暮　もと女
連はみな道でわかれて雪明り　かね女
煤はきや叩きあはせる隣同士　竹珪
御仏寺やきのふで丁ど七日はれ　箋阜
いひあふて向ひ隣や雪下し　少年豊太郎
夜ばかり啼てもないか磯千鳥　春坡
鉢植をならべて春を待にけり　廉夫

南崖叟に対して

より添ふて撫心よし桐火桶　里白
片よせてあるや師走の縄すだれ　曽庸
喰ひものに独かゝるやすゝ払ひ　玦卜
きぬ配り衣紋つくりて返事待　卜少

富山に閑居して

音ばかり聞てゐてさへ越の雪　南崖」（下段）

富山の俳人の句を中心に百三十七人の句が三段にわたって整然と掲載されている。北日本新聞に紹介した通り、守胤のユーモラスな河豚の絵が印象的である。末尾に、南崖という俳人が載るが、この人が富山に来遊したことを歓迎しての一枚摺であった。この南崖（南崖）について、俳人の上野たかし氏は、「続俳額から」（「海士ケ瀬」五十七・八）で、水橋の山王日吉社（水橋神社）にある嘉永七年の(注3)奉納俳句額「義経水橋川渡渉絵額」（義経海士ケ瀬渡渉奉納額）に、この人の句が見えると述べておられる。さらに次のように書いておられる。

南崖　上総の人山澤（山津）氏。諸国行脚の盲俳人で、弘化二年（天保の次）魚津で営まれた芭蕉百五十回忌に宗匠として参じている。ちなみに西天神町の天満宮俳句額（嘉永五年奉納、明治二十四年再奉納）に〈行脚南唯〉という名が巻頭に見えるが、これは(注4)〈南崖〉の誤りではなかろうか。

南崖という俳人は盲目の俳人であつたことは、所収の俳句「音ばかり聞てゐてさへ越の雪」からも分かる。またこの人には、越中滞在中に、『をけはゝき』（嘉永7）という俳書を出している。嘉永年間に、(注5)水橋の桜井家に身を寄せていたようであるが、その後富山にも滞在していたことがこの一枚摺によってわかる。

なお、守胤は松浦守美のように子供向けの売薬版画の下絵は描くことはなかったが、俳諧一枚摺には描いていた。特に、守胤は俳句を嗜んだことがこの摺物によって分かる。また守美は多くの俳書の挿絵の下絵を描いているが、守胤には、『春興之句帖』（西畝編　弘化4）が一冊あるのみである。(注6)

松浦守美の一枚摺

松浦守美（一八二四～八六）は狩野派の絵師であるが、富山藩主前田利保の絵所預りとなり、嘉永年間に木村立嶽や山下守胤、勝胤らとともに『本草通串証図』の下絵を描いた。『本草通串証図』の刊行後、(注7)嘉永六年ごろから売薬版画の下絵を盛んに描くようになるが、一方で俳諧一枚摺の下絵も描いたということが、昨年岩瀬の清水孝一さんのところで見つかった六点の守美画の一枚摺によって知ることが出来、先に述べた通り昨秋折橋家でも六枚見つかった。以下これを紹介する。

①松葉に梅の枝の図　八重ノ社中　明治十年　縦19・3×横17・3センチ
②雷神図　酉の春（万延2）　縦19・0×横25・8センチ
③里芋の図　安政年間　縦18・7×横25・2センチ
④香炉の図　縦19・1×横25・9センチ
⑤盃の図　縦19・0×横24・9センチ
⑥蜃気楼図　嘉永年間　縦38・2センチ×横25・3センチ
⑦笛の図　縦19・4×横26・5センチ

六枚あったが、驚いたことに山下守胤が、そのうちの二枚に挿絵を描いていた。

山下守胤の一枚摺

まず、山下守胤（１７８６～１８６９）の一枚摺を紹介する。

①河豚に葱の図　嘉永年間　縦38・４×横51・２センチ

②牡丹の木に鳥　氷見江連　天保～弘化頃か　縦18・５×横51・１センチ

③河骨に蛍　天保～弘化頃か　縦18・８×横25・８センチ

①は清水さんのところにあったもので、嘉永頃のもの、ほかのものは中島俊夫氏蔵である。いずれも天保頃の氷見の俳壇の一枚摺である。このなかで中心となっているのは、六葉こと紺屋伊左衛門である。弘化三年十二月十三日没であるから、弘化三年以前の摺物である。ここでは、①を翻刻紹介するが、北日本新聞の平成18年12月6日付朝刊の「越中の俳諧一枚摺を読み解く　2」で紹介した河豚の挿絵のものである。

河豚に葱の図

縦38・４×横51・２センチ

鳩一羽ともにゆかず神の留守　梅室
山深く行や一こゑ明の鹿　見外
照すえて水も流れず秋の月　淡斎
家建てわづかに残る木槿かな　為山
餅つきや夜のあけてゐる壁の外　士明
尾のみへるかさね豊や恵比寿講　大径
炭きるやすぽりとぬける尻からげ　タカオカ　逸江

山茶花や折をしみする表えだ　ツバタ　賀水
散かけの羅通す一葉かな　北山
風呂の先とられて寒き泊り哉　悠平
朝がほや花におはれて延る蔓　柳壷

⑧扇の図　縦17・0×横19・3センチ

⑨武士の図　縦19・3×横25・9センチ

⑩杖の図　未の春　縦13・0×横16・6センチ

⑪菫の図　縦19・2×横52・1センチ

⑫放生津八幡宮の家持の歌碑の図　安政四年巳初春　縦19・2×横52・0センチ

このうち①、②は東岩瀬の俳壇の一枚摺で、『東岩瀬郷土史会　会報　102号』(平成19年2月1日)に紹介した。したがって今回、他の四点を紹介する。⑦～⑫は折橋家所蔵のものである。このうち、⑫の**放生津八幡宮の家持の歌碑の図**を紹介する。

里芋の図

縦18・7×横25・2センチ

雨音の寝覚淋しきはせを哉　草露

傘に蜘の巣かゝる萩見かな　田山

胡麻売を戸に立かけて秋の風　印斎

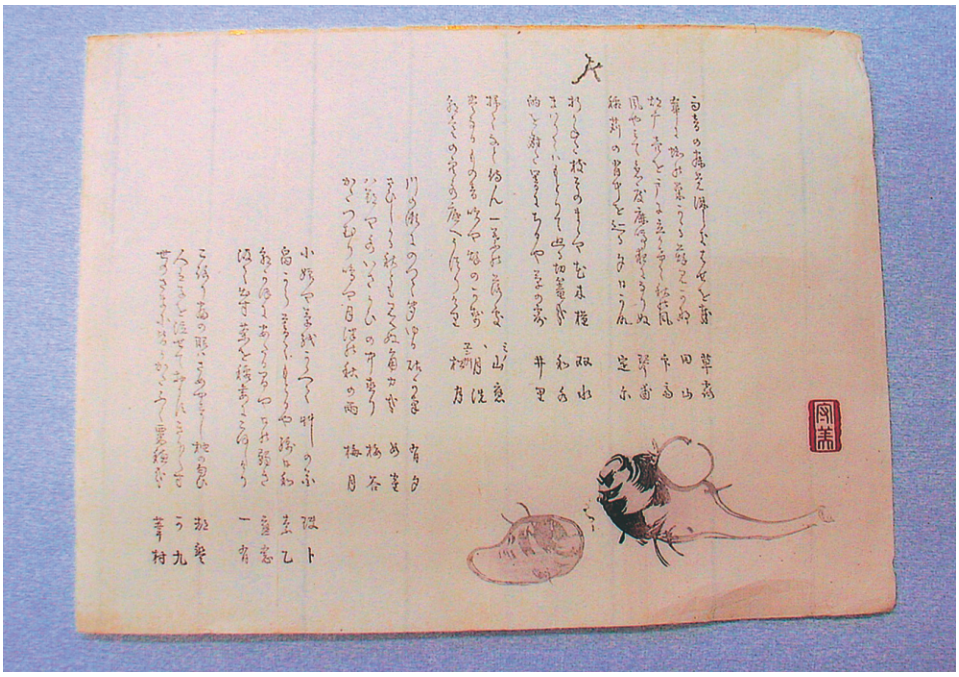
風やみて急度鹿啼夜になりぬ　琴甫

稲苅の背中を辷る夕日かな　定尓

折かねた枝そのまゝや花木槿　双水

まはりてはもどりて廻る切籠哉　和水

的を射た闇にちるや草の露　井里



掃てなど待ん一葉の落処　ミノ山応

豊なるもの音吹や秋のかぜ　〃　月洗

朝寒の空水底へうつりけり　エン州松月

川の瀬にのつて聞ゆる砧かな　有夕

さびしがる秋とも見へぬ角力哉　如雀
八朔や水いさかひの中直り　梅谷
かたつむり啼や月□の秋の雨　梅月

小娘や草紙かゝへて艸の花　扶卜
畠から暮てもどるや綿日和　素乙
朝がほにあたる間や日の弱き　応念
汲で出す茶を稲妻にこぼしけり　一有

ころり寝の眼はさめやすし柚の匂ひ　都盤
人は子を泣せておかずきりぎりす　可九
世のさまに皆がかたぶく粟穂哉　葦村

末尾に所出の葦村は、富山南新町に住んだ山家甚左衛門と称した人である（夙也・六英編『海内千家集』上）。天保から安政年間の諸俳書に見える。小杉戸破の俳人田山、印斎も載る。井里は大門の島の折橋家十一代二策である。これは安政頃の一枚摺である。

香炉の図

縦19・1×横25・9センチ

草木国土悉皆成仏とあれば
うなだれて法きくかほの柳かな　会法院

梅が枝にきゐる鶯のいとおかしければ
うぐいすのなくに笑ふやうめの花　唯称院

ならび居て睦じそうや梅柳　なほえ子
ふたつながら手向たし梅柳　八歳　実乗
樹の間もりて月もにほふやうめ柳　義乗

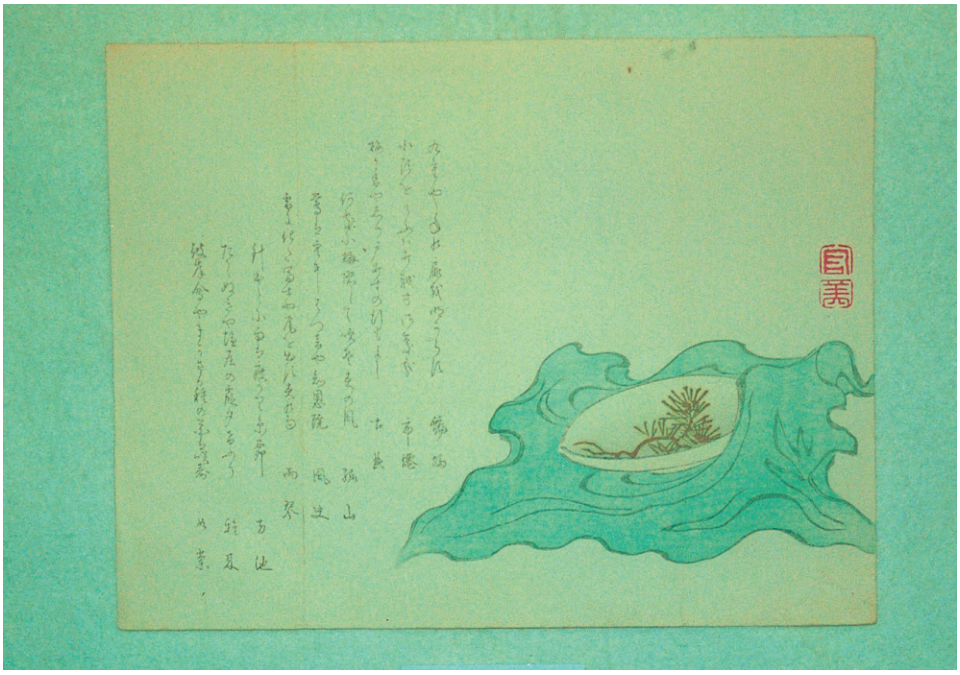
桜

棹ひめの霞の間より寒のことみゆるは峯の桜なりけり　久美子

花を手向んとて庭のおもをみわたせば

立ちならぶ柳桜の樹の間より香を吹送る梅のした風　證誠院

追善の一枚摺であろうか。和歌も載せる。高貴な方々で、どこかの寺院の人たちであろうか。



盃の図

縦19・0×横24・9センチ

九重や年の扉を明がらす　蝙蝠

小頭をけふは打越す御慶哉　市僊

梅が香やしり戸打すの行もよし　古典

何処に梅隠して吹ぞ春の風　弧山

鶯は空にはつ音や知恩院　風史

雪に化た富士や尾を出す春の雨　雨琴

針ほどに雨は痩けり糸柳　方池

たてぬきや塩屋の霞夕けぶり　雅来

彼岸会やまかざる種の花は咲き　如蘭

この一枚摺は、守美が描いているから、富山のものであろうが、幕末から明治頃のものであろう。ここに見える人達は未詳である。

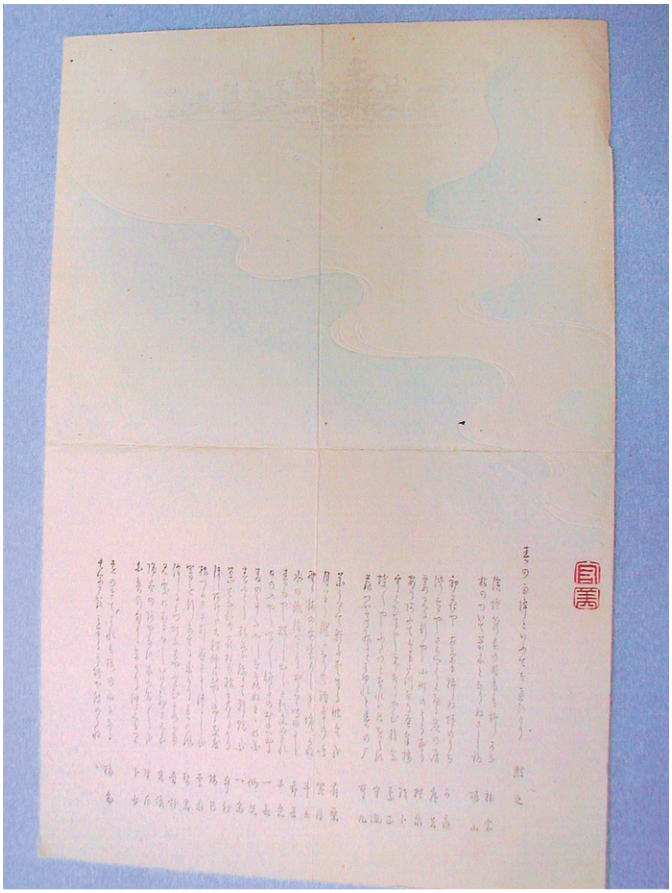
蜃気楼図

縦38・2センチ×横25・3センチ

春の雨降るというては遊びけり　黙之

浜灯篭昼の目当は柳かな　梅室

根のついて若木となりぬさし柳　砺山



初花や古葉も掃ぬ垣のうち　可底
淡雪やさらえてくべる炭の屑　廉夫
霞見に行や小町のうら通り　撫泉
ありあふて鳥もたつなり蜃気楼　玗卜
うぐひすや雫たりやむ檜笠　素正
蝶くやふたつとなれば只をらず　守胤
落ついて居るとみゆれど春の雁　可九

花うりて雛子愛する目元哉　有栗

月はもう朧になりて駒鳥の鳴　買月
野丶梅の要害らしき塘かな　斗立
水の泡消へたり出たり鳴田にし　希芳
春雨や捜し出したる文のきれ　子愿
日の入や鳴く雉子の土手へ出る　一無
麦の事に咄しは落ぬも丶の花　仙夫
春寒う朽葉添る丶軒端哉　一斎
巣ばなれの雀松の根まはりけり　卓裡
ほしあげた大根伸すや市支度　梅谷
根つよさに打尽さる丶つ丶じ哉　李水
闇を行あてに成けり春の風　勢斎
消しにたつ灯にはやふくむ霞かな　魯朴
見処のあるなしいはす初ざくら　其諺
陽炎のあやなす木の間く哉　里白
白魚の旬に成けり沖ぐもり　卜少

遠のきてみれば桜の山になる　橘斎
長閑さをみする有磯や波のうね　〃

この蜃気楼の一枚摺は、北日本新聞「越中の俳諧一枚摺を読み解く　1」（平成18年12月6日付朝刊）で紹介したものである。なお、冒頭に載る桜井梅室が没したのが、嘉永五年十月である。したがってこの発刊は最も遅くても、嘉永五年の春と考えられる。おそらくもっと以前の発刊であろうが、嘉永五年としても守美はまだ二十代である。

全部で二十七名の俳人が載るが、冒頭に見える黙之、末尾に見える橘斎は未詳。この時期の俳書にはまったく見られない人達である。富山藩の藩士であろうか。梅室の次に載る砺山は福野出身で近江の義仲寺無名庵主。以下富山藩の人が載る。おもな俳人を挙げると、まず可庭は、坂可庭で百八莚と号して、『ゆきふくろ』（天保期）、『袖畚集』（嘉永2）の編著がある。安政年間までの諸俳書に載る。可九は西山亭可九で『越の枝折』（嘉永4）がある。他の俳人もいずれも嘉永年間に刊行された俳書に載り、富山の人達である。なお、守胤も句を寄せる。

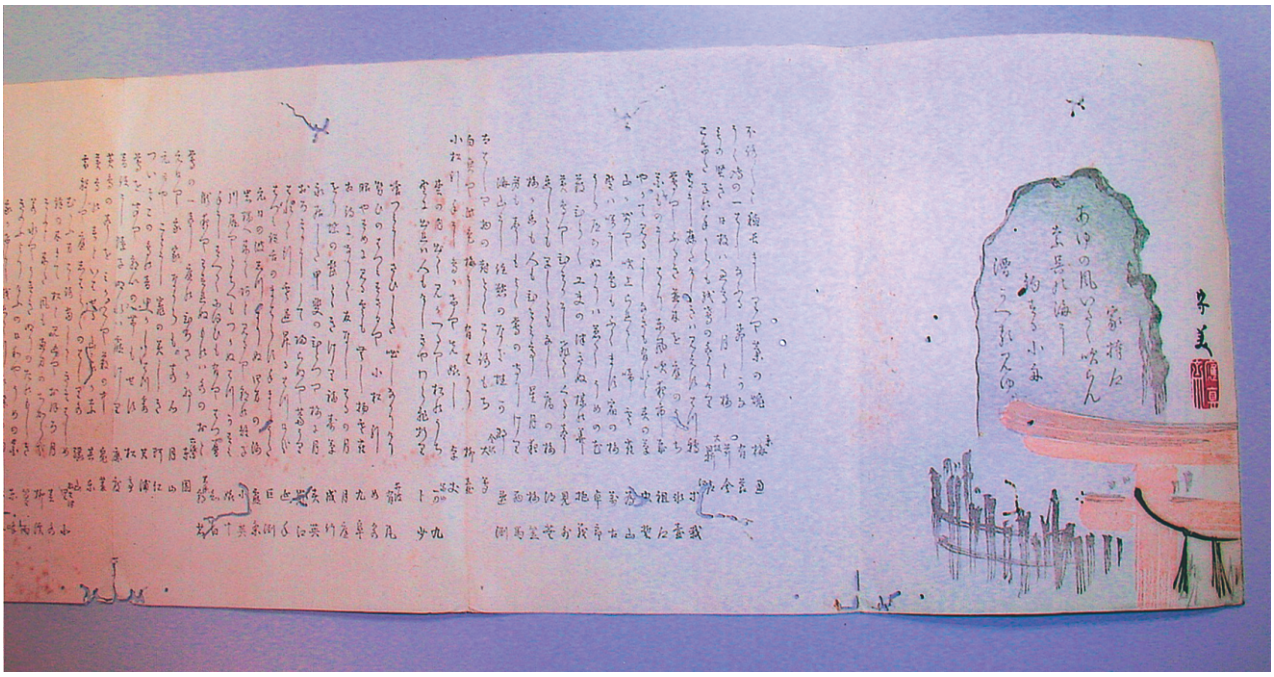
放生津八幡宮の家持の歌碑の図

縦19・2×横52・0センチ

家持卿

あゆの風いたく吹らん
奈古の海に
釣する小船
漕かへる見ゆ

ほろくと穂長まじりや藁の煨　京　梅通
うく鳩の一はしなぶる柳かな　有節
もの堅き日数は過て月と梅　芹舎
こけた子の手からも紙鳶の登りけり　大坂　鼎左
雪に寝たけしきは見えずはつ鴉　江戸　等栽
鶯やふるき並木を庭のうち　氷壺



花ものにばかり東風吹夜市哉　租卿
やがて見るよしもなき有れと春の草　由誓
山かぜや吹上られて啼雲雀　為山
野は咲に色もふくまず宿の花　万古
うら道のぬかりは急ぐうめの花　卓郎
薮ひらく工夫のつきぬ楳の華　抱義
黄鳥やひそかに飛んでくるゝ声　見外
遅しとも早しともなし庵の梅　得蕪
梅が香も人もひそみて星月夜　梅笠
身も声もよく鶯の守りけり　西馬
海山に住慾のなき蛙かな　逸渕

古ばやしや物の対とてこゝろもち　金沢　大夢
白魚や此色梅に有ばかり　柳壺
小松引手に鳥かげや先嬉し　卓丈
松の内出てかへるや松のうち　富山　可九
野に出れば人もけしきやわらひおり　卜少

喰つみにさびしき咄しなかりけり　井波　有尾
勢ひのはづみすさるや小松引　如泉
眼やすめに見る雲も無し揚雲雀　九皐
相待になりて友なしはるの月　月庭
をり蝶の髯とゞきけり福寿草　成竹
永居した甲斐のひとつや梅に月　春英

おろそかにして帰らぬや薺うり　嵐江
はれて行雲追昇るはつ日哉　延年
はづみ程舌のまはらず手まりうた　巨渕
元日の波しづまりぬ四方の海　霞条
岩端へ来て何と見るや朝の雉子　小英
川尻やどちへもつかぬはつがすみ　嬉十
手にすえてにほひも有やはつ烏　知白
朧夜やわすれぬものは水のおと　岩瀬　朝若

鶯の一声庭のひろさかな　六度寺　東園
元日や我家ながらも客心　月山
ついそこの鳥の音ゆかしはつ霞　其浦
鶯を聞や朝心の帯もせず　松亭
音信に障子明ければ霞けり　鹿度
黄鳥の声をみがくや薮の中　鬼麦
黄鳥の春といはせる山家かな　其楽
雪解や庭しばらくのはしり水　驪山

むかふ方こゝろ当してきそはじめ　放生津　里北
鉢の木まで松と見込やおぼろ月　春水
そよと来た風も恵方のちから哉　柳渓
若水やうすき明りのたのもしき　篁雨
きのふよりけふの日和やうめの花　東峰
我かげで戯れて行胡蝶かな　松亭女
囀るにおくれぬ鳥や今朝の春　可松

手のさきも赤うしてつむ若菜哉　桂山
白魚やすくふ手もとの水寒し　二山
動かすにかげの流るゝ柳かな　子邁

福わらべ雀のかよふ日向かな　従容
去年のきさらぎ東都を出立
信濃路より加能もめぐりて
越中の国名呉の浦に春を迎ふ
はつ空や先ひんがしのなつかしき　音好
安政四年巳初春

この一枚摺りの末尾にある音好は江戸の俳人で、この年、五月二十五日には、浪化上人の百五十回遠忌に参加するため、井波の瑞泉寺にいた（『麻頭巾集』安政四年刊）。ここでは、音好を歓迎して十三名の井波の俳人が参加している。

ところで、現在、放生津八幡宮にある大伴家持の歌碑は、昭和十四年建碑のもので、佐々木信綱書で、歌は次のようである。

あゆの風いたく吹くらし奈呉の海人の釣する小舟こぎ隠る見ゆ

画の歌碑は鳥居の後に見えるが、安政四年に八幡宮境内にこのような歌碑が建っていたのであろうか。『和歌童蒙抄』、『袖中抄』では、結句は、歌碑と同じく、「コギカヘルミユ」としている。(注8) 奈呉の地元の人にしてみれば、「こぎ隠る見ゆ」では、漕ぎ隠るべき島陰などないから、「漕かへる見ゆ」の方がよかったのか。もっとも幕末期にこのような歌碑はあったという記録はないものの、想像で書いたとも思われない。

なお、ここに載る新湊の子邁は、天保十四年に芭蕉の一五〇回忌に同じ八幡宮境内に、有磯塚（芭蕉遠忌塚）を建立している。もしこの画にあるように家持の歌碑があったとすれば一体誰が建立したのであろうか。

[注]

1 岩瀬の清水孝一さんの俳諧一枚摺は、現在富山市立郷土博物館に寄贈されている。

2 井里こと二策は、折橋家十一代目で、幼名九郎兵衛、後に儀右衛門と称し、明治十九年十一月一日没（『射水郡十村土筆』小田吉之丈著昭和6）。

3 この渡渉図を描いているのは守美である。嘉永七年、守美は、三十一歳である。

4 大村歌子氏は、『櫻井家の俳諧』にこの奉納額を翻刻されて、（行脚）南崖としておられる。

5 大村歌子氏は、『櫻井家の俳諧』の中で、「南崖は水橋に長く滞在していたのではなかろうか」と述べられている。

6 松浦守美の絵が載っている俳書には次のものがある。

① 『俳諧多磨比呂飛』烏岬編　安政3
② 『俳諧画讃百類集一』一双編　安政3
③ 『俳諧画讃百類集二』一双編　安政4
④ 『麻頭巾集』安政4
⑤ 『八重すさび』慶里・二選編　安政6
⑥ 『俳諧四季織』梅雪編　明治期

7　今日、守美の落款のある売薬版画でもっとも古いものは、嘉永六年の大小暦である。

8　『萬葉集全釋』（鴻巣盛廣著）の［評］に、この歌を次のように評している。

（略）和歌童蒙抄に結句をコギカヘルミユとしてあるが、若し奈呉の浦邊での作とすれば、かふ詠むのが當然である。かの地方には漕ぎ隠るべき島陰などはない。

［参考文献］

「東岩瀬に残る俳諧摺物」坂森幹浩著　『東岩瀬郷土史会　会報　83号』平成14年5月30日

「東岩瀬の俳諧」大西紀夫著　『東岩瀬郷土史会　会報　１０２号』平成19年2月1日

「金沢の絵入り俳諧一枚摺と絵師達」大西紀夫著『江戸文学25』ぺりかん社　二〇〇二年六月

『越中俳諧年譜史』蔵巨水著　桂書房　一九九二年

『櫻井家の俳諧』大村歌子著　櫻井家の俳諧刊行会　平成一六年

『売薬版画』根塚伊三松著　巧玄出版　昭和五四年

『富山の絵馬』塩照夫著　北日本新聞社　平成元年

『句集　水橋』上野たかし著　鳥影社　昭和六二年

『翻刻　麻頭巾集　上』大西紀夫著　『秋桜』第十五号　平成十年三月

（平成19年9月28日受付、平成19年10月31日受理）